

アフガニスタンを知る5冊

【評者】
福岡大学准教授
林 裕



①タリバン

——イスラム原理主義の戦士たち
アハメド・ラシッド・著
講談社、2000年

②アフガン諜報戦争 (上・下)

——CIAの見えざる闘い ソ連侵攻から9.11前夜まで
ステューブ・コール・著
白水社、2011年

③戦禍のアフガニスタンを犬と歩く

ローリー・スチュワート・著
白水社、2010年

④ Bazaar Politics

——Power & pottery in an afghan market town
Noah Coburn・著
Stanford University Press, 2011

⑤アフガニスタンの農村から

——比較文化の視点と方法
大野盛雄・著
岩波新書、1971年

二〇二二年八月以降のアフガニスタンは、劇的で急速な展開を見せている。ガニ政権の崩壊とカブール陥落、タリバンによる全土の掌握宣言と暫定政府樹立の発表。これらは全て、八月の一ヶ月で起こったことである。今、多くの人がアフガニスタン、そしてタリバ

ンとは何なのかを改めて問うている。しかし、私たちが再び台頭したタリバン(タリバン2.0)を理解していくのは、まさにこれからである。そこで、まず一九九六年から二〇〇一年までのアフガニスタンの九割を支配したタリバン(タリバン1.0)を理解すること

から始めることは非常に有益であろう。①はケンブリッジ大学で教育を受けたパキスタン人ジャーナリストの手による古典的著作といえる。筆者は二〇〇一年米国同時多発テロ、多国籍軍によるアフガニスタン攻撃以前に、パキスタン人の強みを見せつけるよう

に現地に密着した取材を通じて、タリバンの台頭を描き出している。

一方②は、パキスタンのみならず、米国やサウジアラビアまでを視野に入れて、一九七九年から二〇〇一年までのアフガニスタンをめぐる国際関係を俯瞰している。現在、タリバンに対して唯一武力反抗をしているアハメド・マスードの父、アハメド・シャー・マスードの死に向かって進んでいく最終章の結びの言葉は、今のアフガニスタンの姿を暗示させる。同書の続編『シークレット・ウォーズ——アメリカ、アフガニスタン、パキスタン三つ巴の諜報戦争』（白水社、二〇一九年）も二〇〇一年以降の希望と挫折を丹念に明らかにしている良書である。

アフガニスタンやタリバンというものを分析的に描き出す手法とは異なり、③は一人のスコットランド出身の英国人が、二〇〇一年二月のアフガ

ニスタン暫定政権発足直後に東部のヘラートからカブルまでを歩いた記録である。ここでは、途上で出会ったタリバンやアフガニスタンの人々を、紋切り型ではなく生き生きと描いている。なお、スチュワートはやがて英国メイ政権の国際開発相となる。

また④は、カブル北方の村でのフィールドワークの成果である。村でのポリティクスは、外部では理解できないような「村の論理」によって展開されていく。私たちが考える合理的選択としての「村の利益」、例えば開発予算の獲得などは、村の論理のなかで、援助を受け取らないという結論に翻訳される。一見非合理的な選択だが、「あえて利益を得ないことで各村人の利害を対立させない」という別の「村の利益」を生む論理が背景にある。その様子は、アフガニスタンにおける援助の混乱を描いているようですらある。

最後に、アフガニスタンという国はどのようなものかを記した、日本人による古典を紹介したい。東京大学東洋文化研究所長を務めた大野盛雄が、一九七〇年六月から四ヵ月半にわたった現地でのフィールドワークに基づいた調査の記録⑤である。しかし、同書はお堅い内容ではなく、乾いた土壤に根を下ろしてたくましく生きるアフガニスタン農村の人々と大野との対話に焦点が当てられている。出版からすでに半世紀が経ったが、読み直すと、いまだ国民の七割前後が農村に暮らす現在のアフガニスタンの姿につながるものが多いことに気づかせてくれる。そして、直近の物事に目を奪われがちな私たちに、時代にかかわらずアフガニスタンという国の底流に横たわる気質や行動規範が、今のアフガニスタンにも変わらず立ち現れていることを教えてくれるのである。●

イスラームとジェンダーを 考える5冊

「第三世界フェミニスト」の挑戦

【評者】
上智大学教授
辻上奈美江



①ムスリム女性に救援は必要か

ライラ・アブー＝ルゴド・著
書肆心水、2018年

②神の嘉する結婚

—イスラームの規範と現代社会
八木久美子・著
東京外国語大学出版会、2020年

③映画で旅するイスラーム

—知られざる世界へ
藤本高之、金子遊・編
論創社、2018年

④フィールド経験からの語り

鳥山純子・編著、長沢栄治・監修
明石書店、2021年

⑤〈家父長制〉は無敵じゃない

—日常からさぐるフェミニストの国際政治
シンシア・エンロー・著
岩波書店、2020年

タリバンのアフガニスタン制圧により、イスラーム主義政権における女性の処遇に対する国際社会の懸念が再び前景化している。女性の権利を普遍的価値と認めるジェンダー・レジームが誕生して約半世紀が経ち、国際社会に

おける女性の教育レベルや政治・経済への参加の機会は確実に向上した。他方でその普及を急ぐあまり、しばしば先進国側には、「開発途上国の家父長制社会の犠牲者である女性を救済しなければならぬ」という、帝国主義的

な眼差しが温存されている。そのなかには性差別の要因をイスラームに求める言説も含まれる。しかし、イスラーム主義の拡大は必ず女性の権利の阻害に帰結するのだろうか。

このような眼差しに抗ってきたの

が、ムスリム女性研究者を含む「第三世界フェミニスト」である。第三世界フェミニストは、ムスリム女性は家父長制社会の脆弱な犠牲者ではないことを、さまざまな方法で発信してきた。

①は、ムスリム女性が部外者からひとくくりにされ、均質的な存在として認識されることへの異議を申し立てた、意欲的な著書である。本書は、欧米的な言説において、ヴェールの着用や名誉犯罪などムスリム社会に見られるさまざまな事象について、その原因が「ムスリム文化」として一般化される現象を批判する。そしてそれが、アフガニスタンやイラクに対する戦争を正当化する材料として流用されたことを指摘し、それを「ジェンダー・オリエンタリズム」と呼んで非難する。的を射た指摘である。

例えば、ムスリム圏の結婚といえは児童婚や複婚など、女性に不利な婚姻

の形態ばかりが注目される傾向がある。②は、男女ともに結婚難に直面する現代エジプトの結婚を題材に検討することで、そのようなステレオタイプを切り崩す。「男性は家族を扶養すべし」とする親世代の結婚観は、若者にはそぐわない。家族には秘匿しても、イスラームの婚姻の要件を満たすことを重視する慣習婚は、男女ともに結婚できない可能性を回避するためにも実践されている。

③はイスラームが広まっている国や地域を舞台にした映画を紹介している。紹介された作品は七〇に上り、ジャンルも多岐に及ぶが、イスラームとジェンダー／セクシュアリティの問題について再考を迫るテーマも多い。

ムスリム文化に対する理解が一般化・均質化されやすい要因のひとつは、ムスリムが他者化されてきたことにある。④は、主にムスリム圏でフィール

ド調査を行った研究者らによる論文集である。調査者が繰り返し現地を訪れ、調査協力者と関係を構築・醸成する過程で、単なる「調査者・被調査者」の関係を超え、互いの人生の一部になる事例を通じて、自己と他者とを切り分けることが難しくなる——他者化を克服する試みが示されている。

家父長制は開発途上国やイスラーム圏にのみ限定されたシステムでないことを国際政治学の視点から指摘する著書に⑤がある。家父長制は常に更新され現代化される「持続可能」な「制度」であるが、だからこそ挑戦しなければならぬ。家父長制的政治構造を打開するために、紛争を経験した女性たちの間で、国を超えた情報や経験が共有されている。本書は異なる立場からシリアの紛争に立ち向かうシリア人女性活動家などに着目し、あえて家父長制への挑戦の必要性を訴える。●